厚真町

上幌内モイ遺跡

－厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査概要報告書－

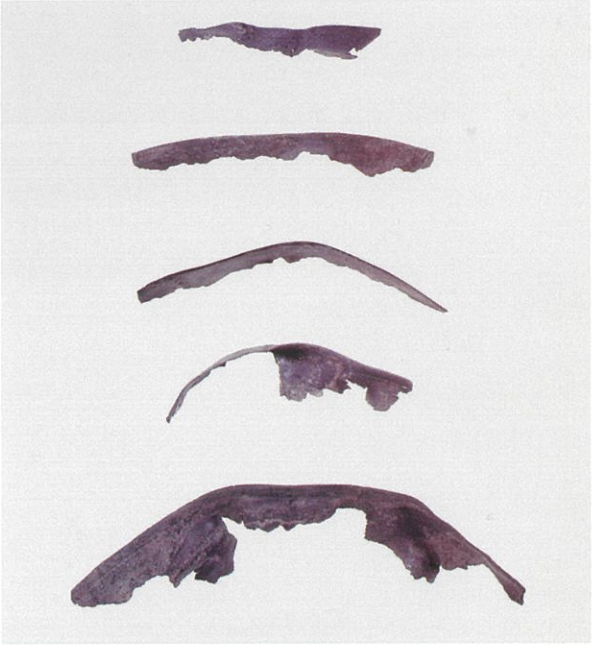
図版１　上幌内モイ遺跡近景（W→）

２００５．３

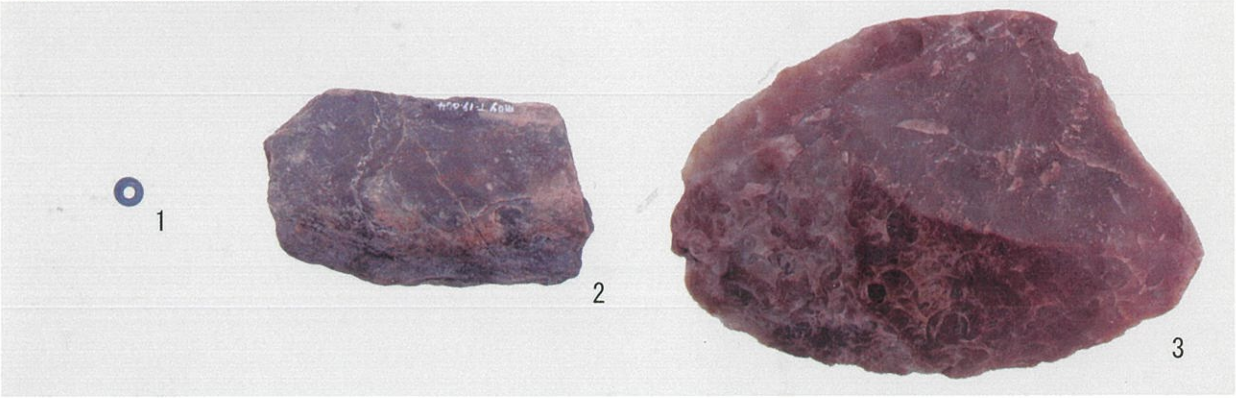
厚真町教育委員会

図版 2　擦文土器復元個体

図版 3　須恵器壷（遺物集中区 1:S=1/4）



図版 4　銅鋺（遺物集中区 2:S=1/3）



図版 5　Ⅲ層出土遺物（1 ガラス玉 :S=1/1, 2･3 火打石 :S=1/2）

例　言

1．本書は、厚幌ダム建設事業に係わる平成16年度に厚真町教育委員会が行った上幌内モイ遺跡発掘調査の概要報告書である。
2．調査は、北海道室蘭土木現業所の委託を受け、厚真町教育委員会が受託し、発掘調査を行った。
3．報告書本文の執筆は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ章を乾、Ⅱ章を小野、Ⅳ章を奈良が担当した。
4．地形測量およびグリッド基準杭設置は、㈱シン技術コンサルに委託した。
5．剥片石器の実測は、㈱シン技術コンサルに委託した。
6．調査の出土遺物等は、厚真町教育委員会で保管している。
7．調査にあたり、下記の機関および個人より御指導と御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

北海道室蘭土木現業所厚幌ダム建設事務所・北海道教育委員会生涯学習部文化課、北海道教育庁胆振教育局、(財)北海道埋蔵文化財センター、(社)北海道ウタリ協会、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構、北海道立アイヌ民族文化研究センター、北海道開拓記念館、苫小牧市博物館、千歳市埋蔵文化財センター、富良野市生涯学習センター、芦別市星の降る里百年記念館、沙流川歴史館、静内町郷土館、小樽市博物館、余市水産博物館、穂別町立博物館、門別町教育委員会、知内町教育委員会、上磯町教育委員会、泊村教育委員会、南富良野町教育委員会、森町教育委員会、岩手県立博物館、青森県埋蔵文化財調査センター、札幌学院大学、北海道浅井学園、幌内自治会、㈱シン技術コンサル、㈱パレオ・ラボ、㈱第四紀地質研究所、(有)講神組

青野友哉、赤石慎三、赤沼英男、秋野茂樹、浅田智晴、阿部義明、天野哲也、安西雅希、石川直章、出穂雅実、乾芳宏、井上雅孝、右代啓視、上屋真一、大泰司統、大沼忠春、岡田路明、荻野幸男、奥田統己、長田佳宏、小野裕子、笠原興、柏木大延、加藤忠、川内谷修、菅野修広、熊谷仁志、倉橋直孝、講神喜助、越田賢一郎、古原敏弘、小針大志、斉藤大朋、酒井秀治、桜井和彦、笹村直幸、佐藤一夫、佐藤剛、佐藤寿男、佐藤幸雄、澤田健、芝田直人、白鳥文雄、杉浦重信、鈴木琢也、鈴木信、鈴木宏行、高橋理、高橋豊彦、田口尚、竹内渉、田才雅彦、田中哲郎、田部淳、種市幸生、田村俊之、千葉英一、角田隆志、椿坂恭代、鶴丸俊明、寺崎康史、土肥研晶、豊田宏良、豊原熙司、長沼孝、長町章弘、成田滋彦、西田茂、西脇対名夫、野辺地初雄、長谷山隆博、畑宏明、広田良成、兵頭千秋、深沢百合子、福井達也、福田裕二、藤田登、藤原秀樹、松田淳子、松谷純一、三浦圭介、三浦正人、三野紀雄、蓑島栄紀、宮夫靖夫、宗像公司、森秀之、森靖裕、森岡健治、薮下詩乃、藪中剛司、渡辺真吾

凡　例

1．土層注記については、以下の略号を用いた。

主体土－A：主体土にA多量　　主体土＝B：主体土にB少量　　主体土≡C：主体土にC微量

2．火山灰について以下の略号を用いた。

樽前a砂質降下火山灰：Ta-a　　駒ヶ岳C2砂質降下火山灰：Ko-C2
樽前b細礫質降下軽石：Ta-b　　白頭山苫小牧火山灰：B-Tm
樽前c砂質降下軽石：Ta-c　　樽前d降下スコリア：Ta-d
恵庭a降下軽石：En-a

Ⅰ　調査の概要

1．調査要項

事 業 名：厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道室蘭土木現業所　　受 託 者：厚真町教育委員会
遺 跡 名：上幌内モイ遺跡（Ｊ－13－79）　　所 在 地：勇払郡厚真町字幌内 395－１
調査期間：（発掘）平成 16 年 5 月 11 日 ～ 10 月 31 日
　　（整理）平成 16 年 11 月 1 日 ～ 平成 17 年 3 月 18 日

2．調査体制

厚真町教育委員会　教 育 長　幅田　敏夫
　　生涯学習課　課　　長　長橋　政徳　　係　　長　森田　正樹
　　嘱託職員　乾　哲也（調査担当者）
　　〃　　小野　哲也（調査員）　　奈良　智法（調査員）
　　〃　　佐々木　都（事務員）
　　発掘作業員　46 名　　整理作業員 19 名

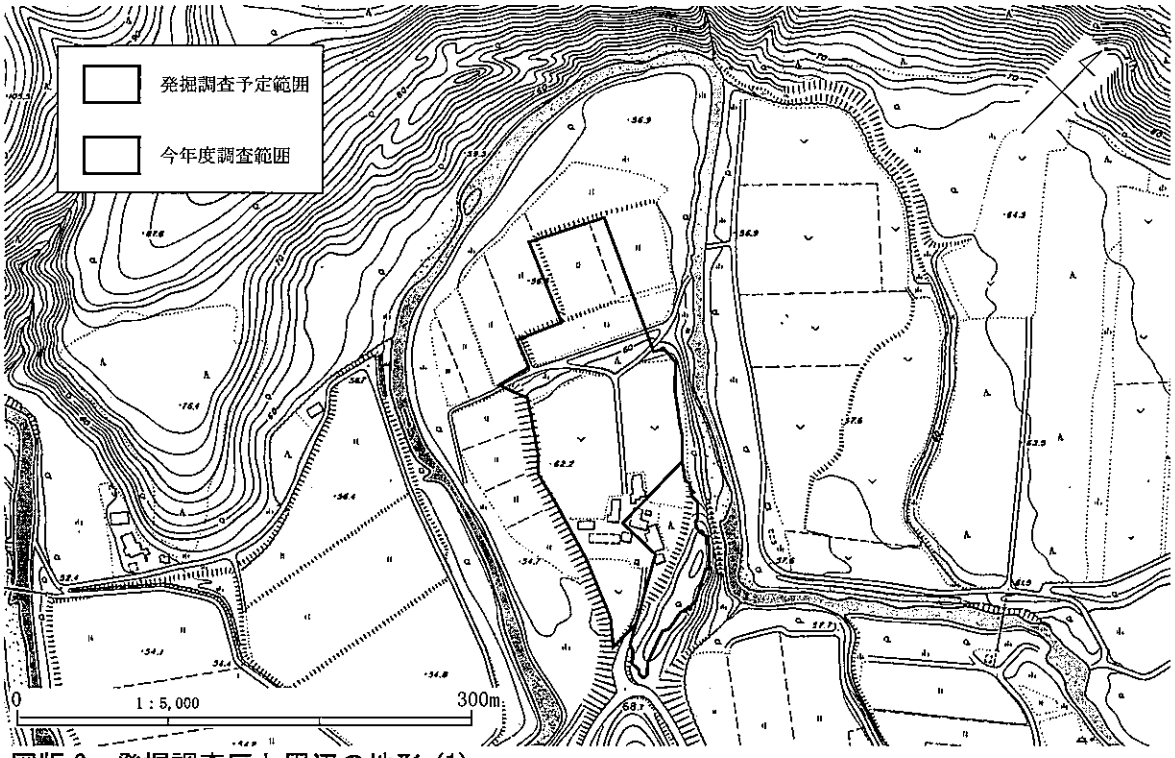
3．発掘調査の経緯

厚真町は、町内を流れる二級河川厚真川の中下流域に約 3,000ha もの広大な水田地帯が広がる農業の街である。しかし、度重なる洪水や春の灌漑用水確保・人口集中傾向にある中心部の都市用水確保などの水資源に係わる問題が深刻化し、既存の農業用ダムの規模を上回る多目的ダムの建設が陳情されていた。これを受け、平成 7 年に農業用水・都市用水の確保や洪水対策などの多目的ダムとして「厚幌ダム」建設工事に関する基本協定が北海道と厚真町との間で締結された。平成 12 年からは建設工事に係わる埋蔵文化財の所在確認等の調査が北海道教育委員会（以下、道教委）によって行われ、平成 14 年度より 2 ヵ年にわたって道道切替部分の厚幌 1 遺跡の発掘調査が厚真町教育委員会（以下、町教委）によって開始されている。今年度の上幌内モイ遺跡は厚幌ダムの湛水区域内に所在する遺跡で、平成 14・15 年度の 2 ヵ年に道教委による試掘調査が行われ、包蔵地全面の 15,650 ㎡の発掘調査面積が判明した。うち、半島状にのびる丘陵基部側を遺構確認調査区（670 ㎡）との回答書が道教委より通知された（平成 15 年 11 月 14 日付　教文第 6492 号）。発掘調査は町教委により今年度から行われ、3,942.37 ㎡を行った。調査期間中に発掘区外の低位段丘面に包蔵地の広がりを確認したことから、6,514 ㎡が追加され、調査面積は合計 22,164 ㎡となった（平成 16 年 11 月 22 日付け　教文第 4617 号）。平成 17 年度以降も継続調査の予定である。

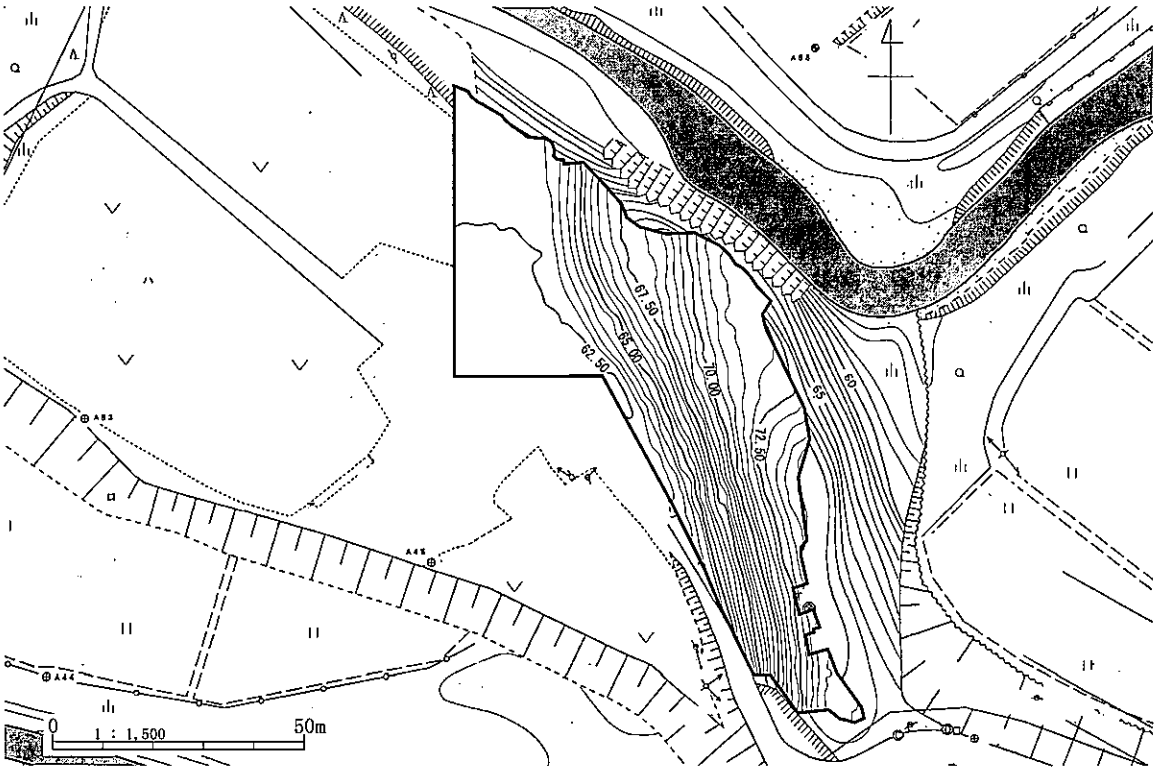
4．遺跡および周辺の地形

上幌内モイ遺跡は厚真川の河口より約 29.0km 遡る夕張山地の南端部、山間の上流域左岸に位置する。遺跡周辺の地形は穂別側に源流部をもつ厚真川の支流オニキシベ川と夕張側に源流部をもつショロマ川の合流点に挟まれた部分に所在する。遺跡は、南西に流れる厚真川が大きく北西へ蛇行する部分に張出した標高 63.0～74.5m の半島状に伸びた尾根上に形成される狭小な高位河岸段丘

面（丘陵部）と中位河岸段丘面（標高62m前後）と低位河岸段丘面（標高57～59m前後）の３面に形成されている。高位段丘面は、厚真川の河川浸食により東側が崩落し、河川までの比高差約18mの崖面が形成され、新第三紀の砂岩泥岩の互層堆積物が露出している。遺跡内の時期的な特徴として、高位段丘面および先端部の狭小な平坦面には後期旧石器時代から縄文時代後期初頭までの遺構・遺物が多数見つかり、中低位段丘面では主に擦文・アイヌ期の遺構群が検出されている。



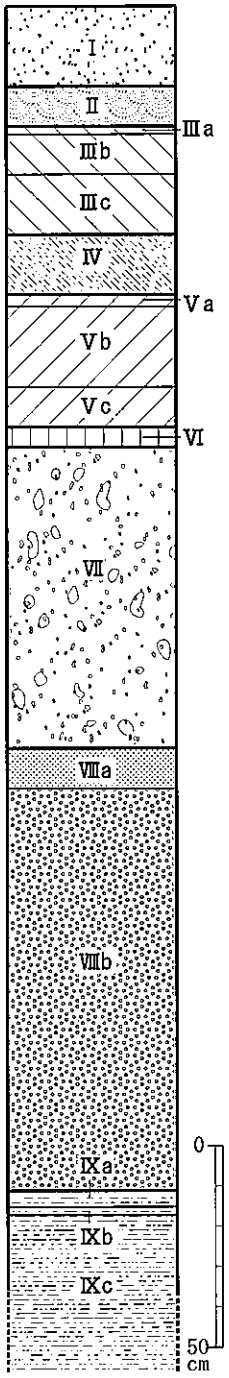
図版６　発掘調査区と周辺の地形（1）



図版７　発掘調査区と周辺の地形（2）［調査区内の等高線はⅢ層上面のもの］

5. 遺跡内の地質

基本的には新第三紀に形成された砂岩泥岩の互層堆積物が基盤で、その上に支笏火山・恵庭岳・樽前山からの火山噴出物、河岸段丘堆積物と黒色腐植土層からなる。支笏火山灰は高位段丘面の一部に新第三紀岩盤を直接被覆する状態で確認している。またこの上には、恵庭a降下軽石を含む風成砂層が発達していた。堆積概況は各段丘面毎に堆積物が異なる複雑な様相を示しているが、基本的な土層を下記に図示する。



図版8
基本土層
柱状模式図

［基本土層］

0層：撹乱・耕作土

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：近世火山噴出物

a；樽前a砂質降下火山灰（1739年降下）。耕作により部分的に堆積。

b；駒ヶ岳C2砂質降下火山灰（1694年降下）。部分的に堆積。

c；樽前b細礫質降下軽石（1667年降下）。層厚15cm前後。

Ⅲ層：黒色腐植土

a；Ⅱc層を斑状に含む黒褐色砂質シルト。層厚1cm前後。やや赤み有り。近世包含層。

b；やや粘性のある黒色シルト。層厚5cm前後。上位が中近世アイヌ期包含層。下位が擦文期包含層。Ⅲb層とⅢc層との層境に白頭山苫小牧火山灰が部分的に堆積する。

c；黒褐色～暗褐色で砂質シルト。層厚10cm前後。続縄文～縄文晩期後葉の包含層。

Ⅳ層：樽前c砂質降下軽石（BP2,500～3,000年降下）。層厚10cm前後。

Ⅴ層：黒色腐植土

a；黒褐色砂質シルト。層厚3cm前後。縄文晩期包含層。

b；黒色シルト。層厚0～30cm。高位および低位段丘面では未発達。縄文中・後期包含層。

c；黒褐色シルト。層厚10cm前後。縄文前・中期包含層。

Ⅵ層：漸移層。暗褐色シルト。層厚5cm前後。縄文早期包含層。

Ⅶ層：沖積世河岸段丘堆積物。中位段丘面に発達。Ta-d主体の再堆積層。亜角礫を部分的に多量に含む。

Ⅷ層：樽前d降下スコリア（BP8,000～9,000年降下）。低位段丘面には堆積していない。

a；樽前d1細礫質降下スコリア。層厚10cm前後。

b；樽前d2中礫質降下スコリア。層厚100cm前後。

Ⅸ層：黄褐色ローム層。高位段丘面に堆積。3層に細分。後期旧石器文化期包含層。

Ⅹ層：洪積世河岸段丘堆積物。（高位段丘面のみに斜面堆積）

Ⅺ層：風成堆積砂層。上部に恵庭a降下軽石を含む。

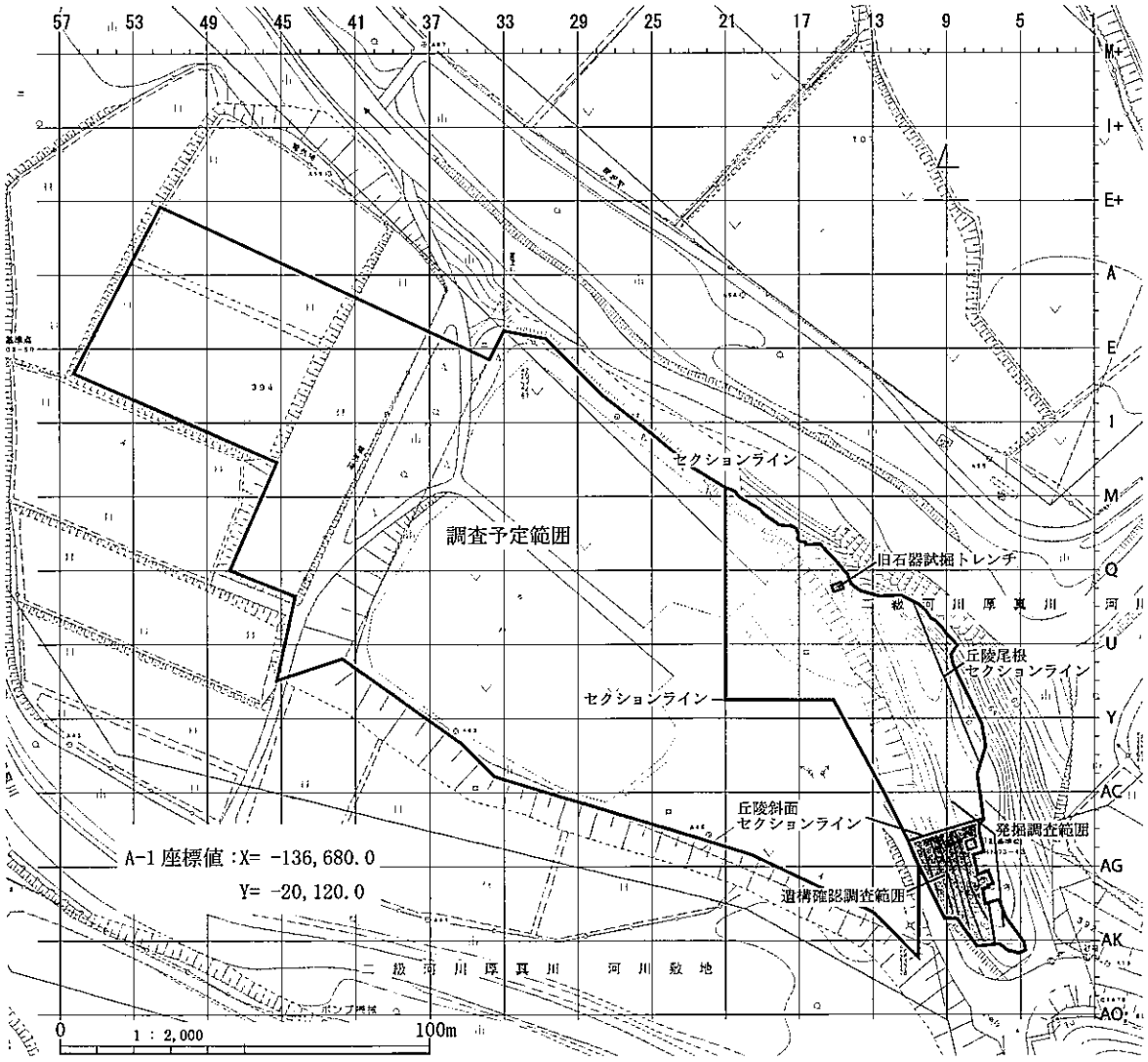
6. 調査の方法

A 発掘区の設定

今年度の発掘区は、平坦面においてXラインと21ラインまでの直交する範囲とし、高位段丘面において、東側が急傾斜面あるいは崖面となっていることから1～1.5mの安全帯を残して設定した。調査のグリッドは公共座標（日本測地系）に従い、包含層の広がりが想定された段丘面全てを含む200m×280mの広域に設定し、5m四方のメッシュで区分した。グリッド網の起点は北東コーナーとし、南北のX軸をA・B・C・・・のアルファベット列で、東西のY軸ラインを1・2・3・・・のアラビア数字列とした。各グリッドの呼称も北東コーナーの杭とし、A－1区、A－2区・・・とし記した。しかし、調査途中に発掘区が北側へ拡幅したことから、Aラインより北側のものをアルファベット＋アラビア数字とし、グリッド網を拡幅した。

現地での設定方法は20ヵ所ほど㈱シン技術コンサルに設置委託した基本杭を基準に調査開始と共に技能作業員が光波式トータルステーションを用いて設置した。

絶対高は、道道上幌内早来停車場線沿いに南西方向へ約1,100mに所在する「厚真川2000　仮BMNo.22　H＝50.437M　北海道室蘭土木現業所」に準拠し、平成14・15年度調査の厚幌1遺跡との整合性を確保している。



図版9　グリッド設定図

B 調査方法

伐採および安全柵設置の後、バックホーにより調査員立会のもと樹根を残しながら表土・火山灰除去を行った。火山灰は3cm前後残し、ジョレンを用いて人力でⅢ層上面まで清掃し、発掘区全面の火山灰除去が終了した時点でラジヘリを用いた地形測量を行った。また、これに平行して調査区内のグリッド設定も行っている。

調査は、大きく①高位段丘面の平坦部と斜面、②遺構確認調査の尾根部の急傾斜面、③中位段丘面、④尾根基部の平坦面に区分し、Ta-c火山灰(Ⅳ層)を挟んだⅢ層とⅤ層の層位毎行った。高位段丘面についてはⅢ層上面で溝跡を確認できなかったもののチャシ跡が想定されたことから、Ⅵ層までの先行トレンチを平坦面中央の北西－南東軸に掘開し、造成の痕跡が無いか確認してからの包含層調査を行った。また、調査排土については高位段丘面まで、ベルトコンベアーを設置し、人力併用で調査区外への排出作業を行った。急傾斜面である遺構確認調査区は、バックホーでⅢ～Ⅵ層までを1回で除去した後、人力でジョレンを用いてTピットの有無の確認を中心に精査を行っている。中位段丘面については、厚真川に面した北東側から開始した。Ⅲa層からⅢc層上位にかけては移植ゴテを用いて2cm程度ずつ掘り下げ、Ⅲc層中位にて柱穴等の遺構確認精査を行っている。バックホーとジョレンでの人力並用でTa-c火山灰の除去作業を行い、Ⅴ層はⅤc層まで遺物出土の頻度を確認しながら一部ジョレンを用いて調査し、Ⅵ層上面でTピットなどの遺構確認を行っている。

遺物については、光波式トータルステーションを用いて、全てに遺物番号を付し、XYZ座標（XYは旧公共座標）を記録し、層位は調査員の指示のもと手簿（日付・グリッド・層位・遺物名）を記載しながら取り上げた。

遺構は、住居跡など包含層上面で確認できたものは、先行してトレンチを設定し、できるだけ遺構構築面で調査できるよう心がけ、焼土や遺物集中区、炭化物集中区等については、ほぼ全量をサンプリングし、大半は現場期間中にフローテーション処理を行っている。図化についても、光波式トータルステーションを用いて平面形およびエレベーションを記録し、堆積状態については実測を行った。各経過途中は35mmのデジタルカメラ、モノクロ・リバーサル・ネガカラーフィルムで写真記録を行っている。

図版10 ベルトコンベアによる排土移動作業状況 (S→)

図版11 中位段丘面Ⅲ層調査状況 (SW→)

Ⅱ　Ⅲ層の調査

1．概　要

Ⅲ層の遺構･遺物はⅢb 層の上位と下位というように面的な違いをもって検出された。アイヌ文化期に属する遺物は、礫 758 点、金属製品 8 点、骨角器 1 点、ガラス玉 3 点で、Ⅲb 層上位で出土した。擦文文化期に属すると考えられる遺物は、土器 1,600 点、礫石器 42 点、フレイク 211 点、礫 1,882 点、金属製品 174 点で、Ⅲb 層下位で出土した(※いずれも取上げ点数)。

2．アイヌ文化期(図版 19)

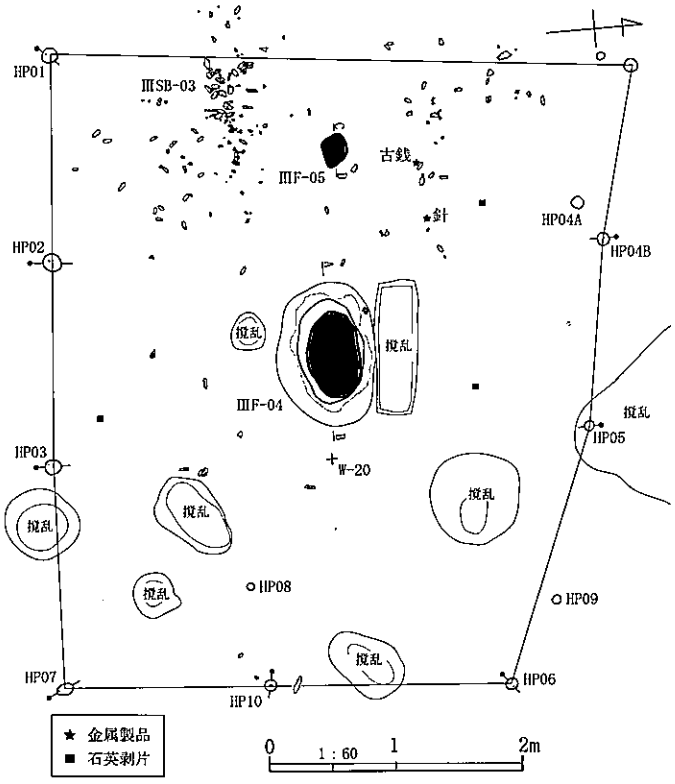
住居跡 1 軒、建物跡 2 基、焼土 3 基、炭化物集中 12 ヶ所、礫集中 3 ヶ所を検出した。

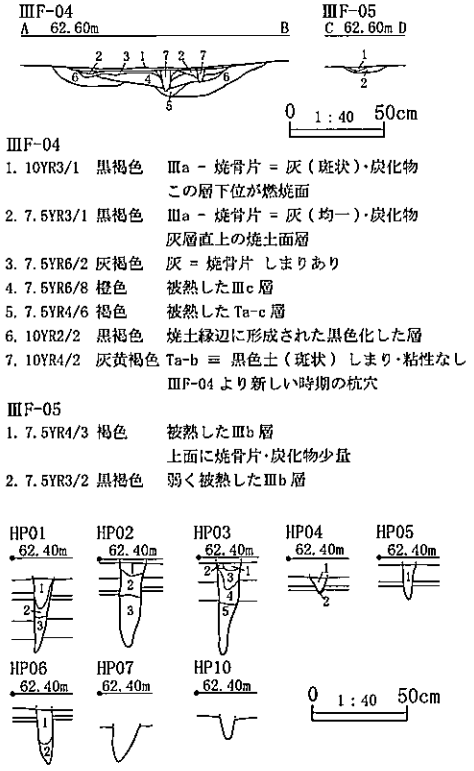
住居跡は平地式のもので、東西軸を向く長方形プランに大小 2 基の炉を伴っていた(図版 12,13,15)。柱穴は断面先端が尖るもので、プラン隅に位置する HP1、HP6、HP7 は上部が炉の方向にやや傾く形で打ち込まれていた(図版 14)。伴う遺物は長軸 10cm 前後の棒状礫 196 点の他、炉周辺より出土した針と思われる鉄製品 1 点、「聖宋元宝」(初鋳 1101 年)と思われる古銭 1 点(図版 16)、火打石として利用したと思われる石英の結晶 1 点とその破片と思われる石英片 5 点、炉灰層中より出土した中柄先端部 1 点、ガラス玉片 2 点である。また炉灰層からは炭化したクルミ等の種子や、シカとサケ科を主体とする焼骨小片が検出されている。

炉を伴わない建物跡は、4 つの柱穴で 1 辺約 2m の正方形プランを形成し、その中央付近に 1 つの柱穴を配し、計 5 つの柱穴で構成されている(図版 17)。柱穴は断面先端が丸くなっており(図版 18)、掘立柱であった可能性が高い。倉庫跡のようなものかもしれない。

焼土はいずれもシカとサケ科を主体とする焼骨片と種子等の炭化物を含んでおり、厚さ 10cm 程の灰層を持つ例もあった。

この時期の遺物は脇差のような短刀の鍔(図版 44)、ニンカリと思われる金属製品片、小札片





図版 12　アイヌ文化期平地式住居跡(ⅢH-01)平面図

1点、刀子刃部1点(図版45)、刀子茎部1点、性格不明の鉄製品3点の他、コバルトブルーの色をしたガラス玉が1点出土している(図版5-1)。ただしガラス玉については近くで擦文土器も出土していることから擦文期の可能性もあり(図版47)、今後の検討を要する。これら資料はその検出層位より、中世～近世初頭頃の時期と考えられる。

図版13　平地式住居跡（ⅢH-01:NW→）

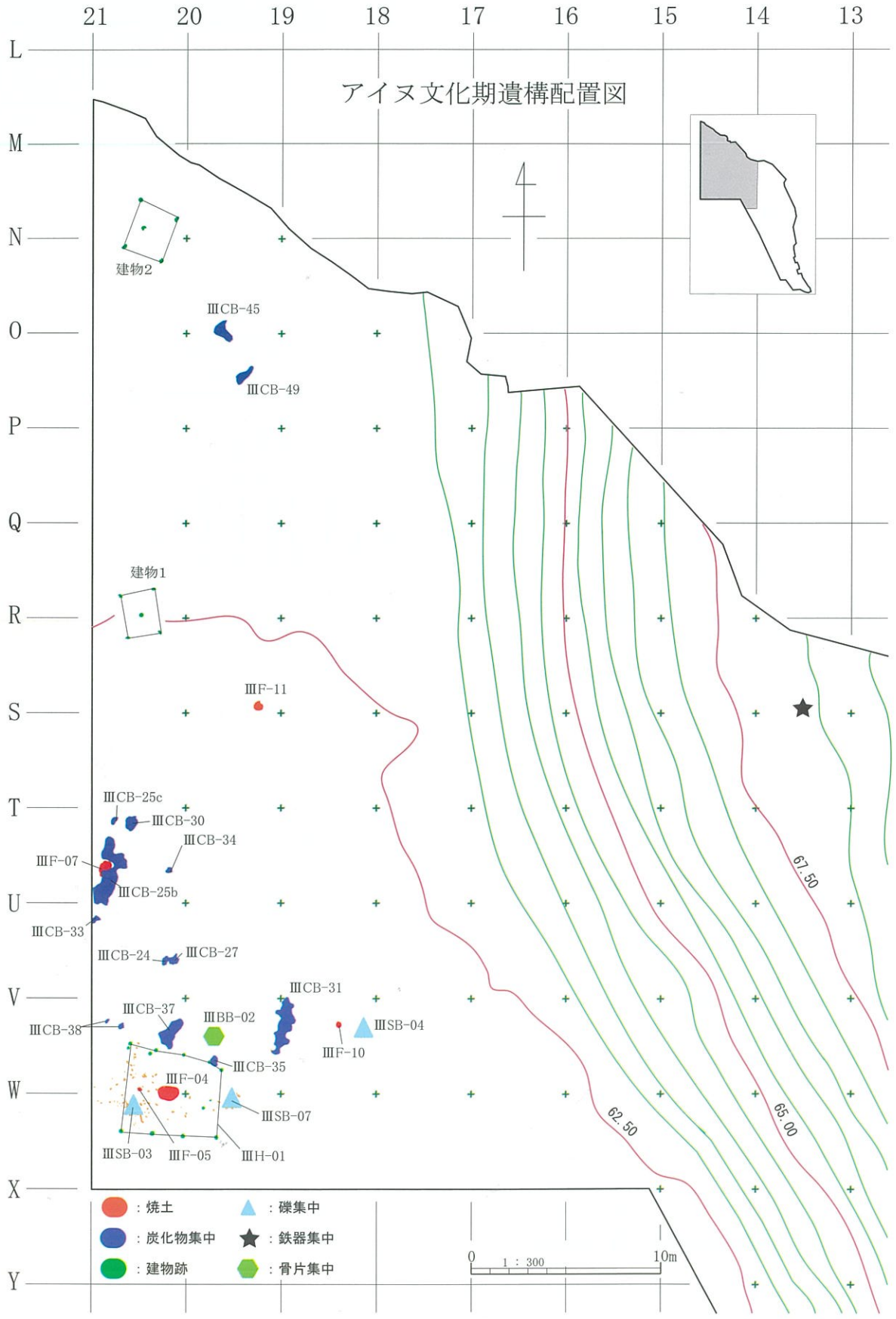
図版14 住居柱穴断面（SE→）

図版15　住居炉跡（ⅢF-04,05）検出状態（SW→）

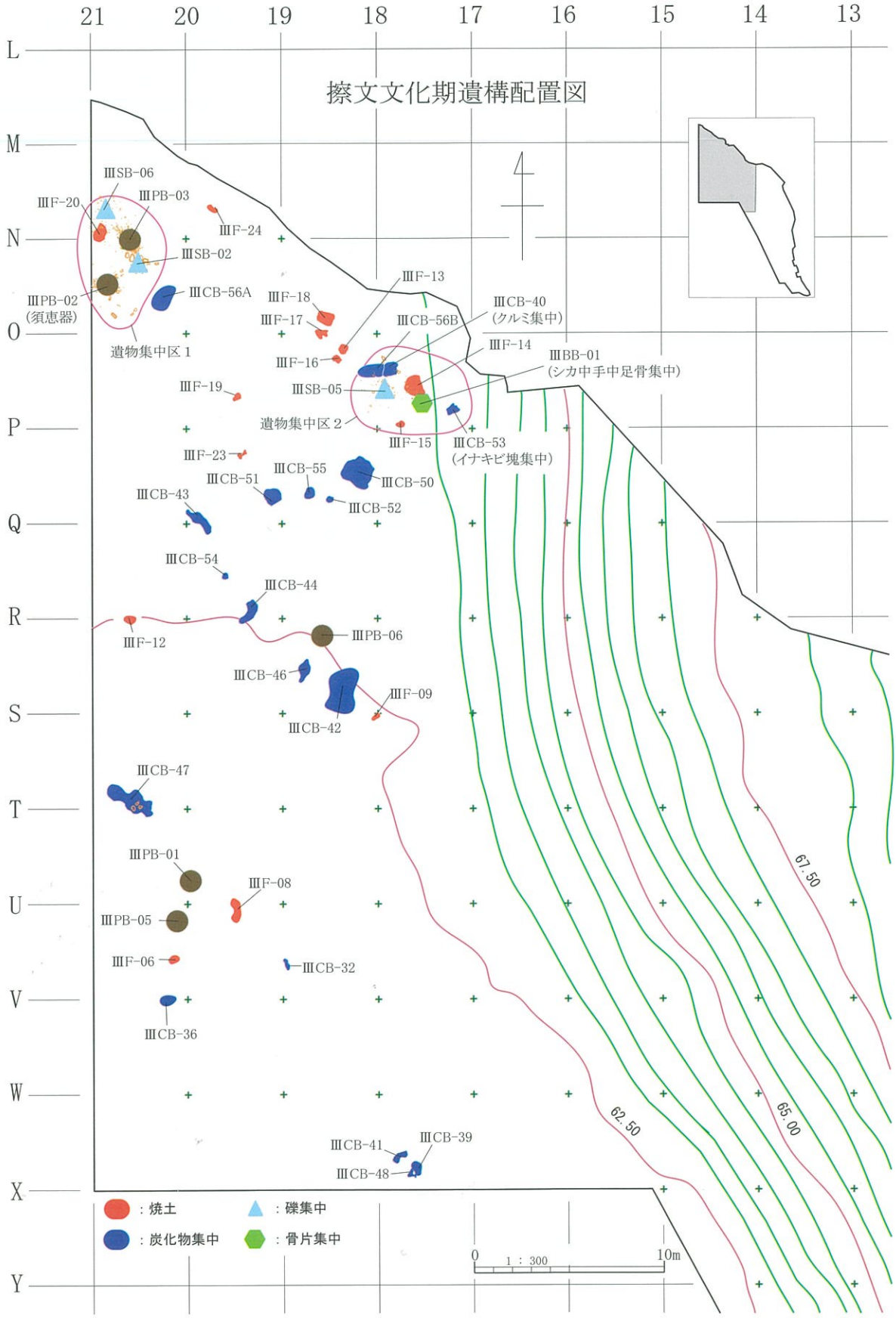
図版16　古銭出土状態（S→）

図版17　建物2(W→)

図版18　建物2柱穴断面（SE→）



図版19　アイヌ文化期遺構配置図



図版20　擦文文化期遺構配置図

３．擦文文化期(図版 20)

擦文文化期の遺構･遺物は平坦部で焼土 14 基、炭化物集中 19 ヶ所、土器集中 5 ヶ所、礫集中 3 ヶ所が検出された。

この内、焼土はその内容から大きく 2 種類に分けることができる。1 つは骨片をほとんど含まないか、限定的な部位の骨を伴う例(ⅢF-14,16,17,18,20,23,24)で、もう 1 つはシカとウグイを主体とする焼骨小片を多量に伴う例(ⅢF-06,08,12,19)である。

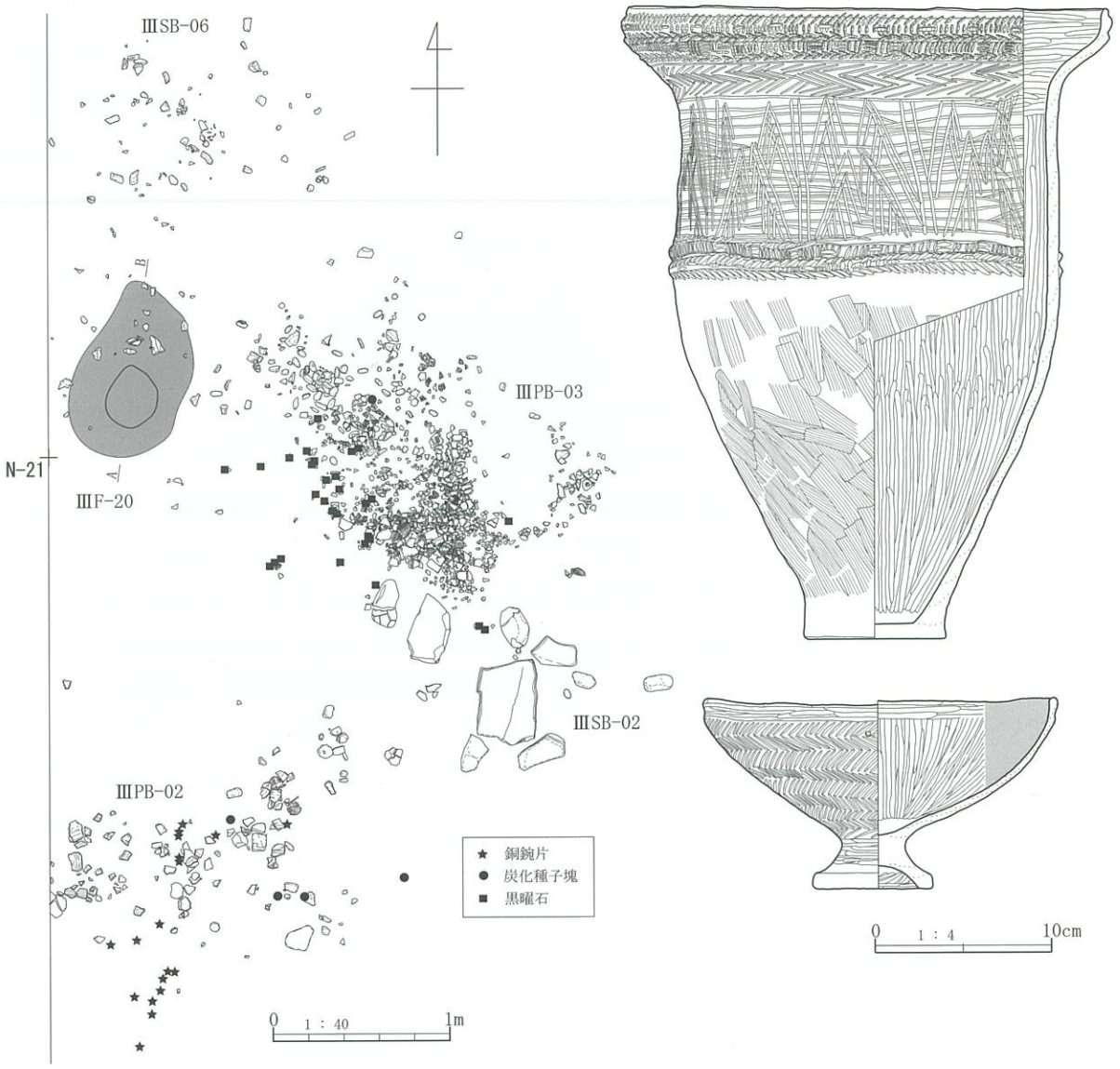
前者の例の内、ⅢF-20 とⅢF-14 の周囲では多くの遺物が密集して出土した。以下ではⅢF-20 周辺の遺物群を遺物集中区 1、ⅢF-14 周辺の遺物群を遺物集中区 2 として報告する。

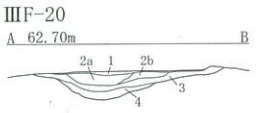
遺物集中区 1(図版 21,24)は、須恵器壷(ⅢPB-02)、擦文土器の破片(ⅢPB-03:図版 25)、未被熱の大型板状礫(ⅢSB-02)、被熱した棒状礫(ⅢSB-06)、黒曜石フレイク(図版 23)がⅢF-20 を囲むように出土した所であり、ⅢPB-02 の所では他に銅鋺 1 個体分の破片(図版 22)、炭化したイナキビの塊やクルミが少量と、多量の炭化材が出土した。ここで出土した遺物はいずれも被熱しており、土器接合時の観察では破片の状態になってから被熱していることがわかった。これら遺物集中はその出土状態から、来年度調査区域にまで分布が広がるものと考えられる。

出土した須恵器壷は口唇部が欠損しているが、現存の器高は 31 ㎝、胴部最大径 26 ㎝で、頚部に沈線で隅丸六角形状の文様が施されている。ⅢPB-03 では甕 3 個体･坏 2 個体分の破片が出土している(図版 26-1～5)。この内、図版 21 に図示した甕は、胴部文様帯は 3 本の横走沈線で 2 段に区画した後、下段は横走沈線を施してから 2 条からなる縦位の沈線を軸とした針葉樹状文を施し、上段は横位の綾杉状文が施されている。胴部文様帯下端に貼り廻らされた粘土紐と口縁部文様帯には、横走する沈線を施した後、矢羽根状を主体とする刻みを板状施文具の木口面を押し当てるようにして施している。同じく図示した高坏は、体部に横位の綾杉状文を施し、内面を黒色処理している。ⅢPB-03 周辺で出土した黒曜石フレイクは、いずれも石器製作に使えるような定型的なものではなく、転礫に強い打撃を与えて砕いたようなものばかりである。接合を行ったところ、拳半分程の塊になった(図版 26-6)。銅鋺は体部での厚さが 1 ㎜弱程で口縁部は肥厚しており、被熱による溶解で湯玉状に変形した例もあった。イナキビ塊は器状のものに容れられたものが炭化したようで、器を模った面を残して炭化している。

遺物集中区 2(図版 27)では、被熱した棒状礫と擦文土器坏 2 個体分の破片(ⅢSB-05:図版 29)の他、炭化したクルミの集積(ⅢCB-40:図版 31)、被熱した銅鋺の破片(図版 32)、鉄鏃(図版 33)が出土し、さらに面的に若干低い位置でⅢF-14(図版 34)と人為的に縦割りされたシカの中手･中足骨の焼けたもの(ⅢBB-01:図版 35)、並びに団子状にまとまったイナキビ塊の炭化したもの(ⅢCB-53:図版 36)が出土している。

ここで出土した擦文土器坏は、段状沈線を施した高坏 1 点と器高 4 ㎝の小型の坏 1 点である(図版 37-1,2)。銅鋺は集中区 1 で出土したものよりも薄手で、口縁下内面に沈線の入るものと入らないものがあり、沈線の入るものの中にも口縁から沈線までの幅が狭いものと広いものとがあり、最低でも 3 個体はあることが認められた。鉄鏃は区部が断面四角で裾の広がるような形をしており先端部は柳葉状で返しはない。イナキビ塊は径 2 ㎝前後の団子状で(図版 28,37-4～7)、計 79 点がまとまって出土した。1 つ 1 つを観察すると、粒の形が残った状態で固まっているため、潰して粉にしたのではなく何か別の材料と混ぜ合わせて団子状にしたものと思われ





ⅢF-20

1. 7.5YR2/3 極暗褐色 2層主体にⅢb斑状に少量含む焼土燃焼面
2a. 5YR5/8 明赤褐色 被熱し強く赤色化したⅢc層
2b. 7.5YR4/4 褐色 被熱し弱く赤色化したⅢc層
3. 7.5YR3/2 黒褐色 被熱し弱く赤色化したⅢc層 2層と4層を斑状に同量比含む
4. 10YR2/1 黒色 焼土縁辺に形成された黒色化した層

図版 21　遺物集中区 1 平面図

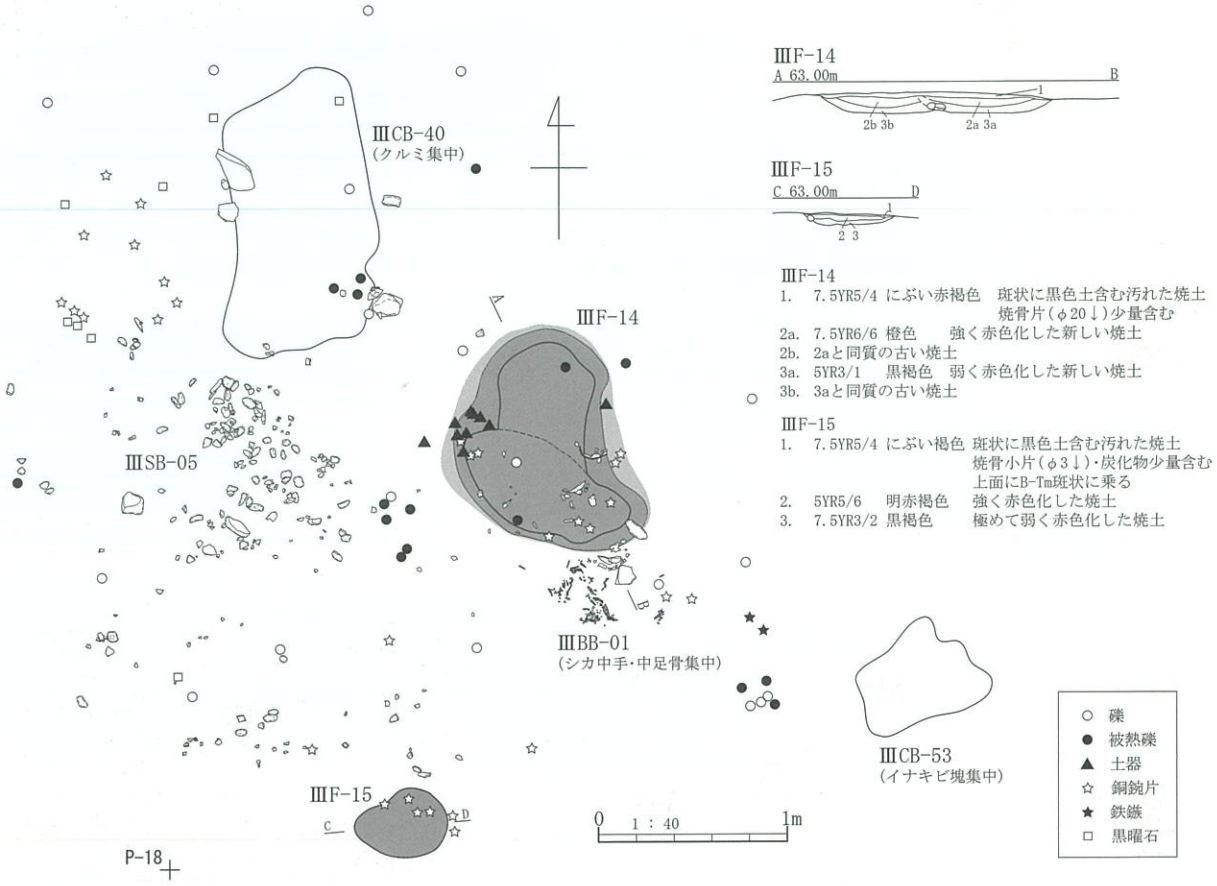
図版 22　銅鋺片出土状態（E→）

図版 23　黒曜石フレイク出土状態（SW→）

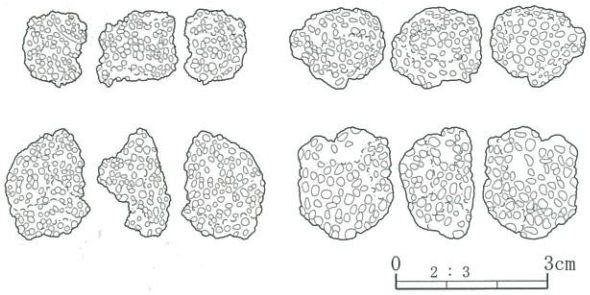
図版 24　遺物集中区 1 検出状態（SE→）

図版 25　ⅢPB-03 出土状態（S→）

図版 26　遺物集中区 1 出土遺物（土器 S=1/4，黒曜石 S=1/2）



図版 27　遺物集中区 2 平面図



図版 28　炭化イナキビ塊実測図

図版 29　礫集中（ⅢSB-05）検出状態（W→）

図版 30　土器出土状態（NE→）

図版 31　炭化クルミ集中（ⅢCB-40:W→）

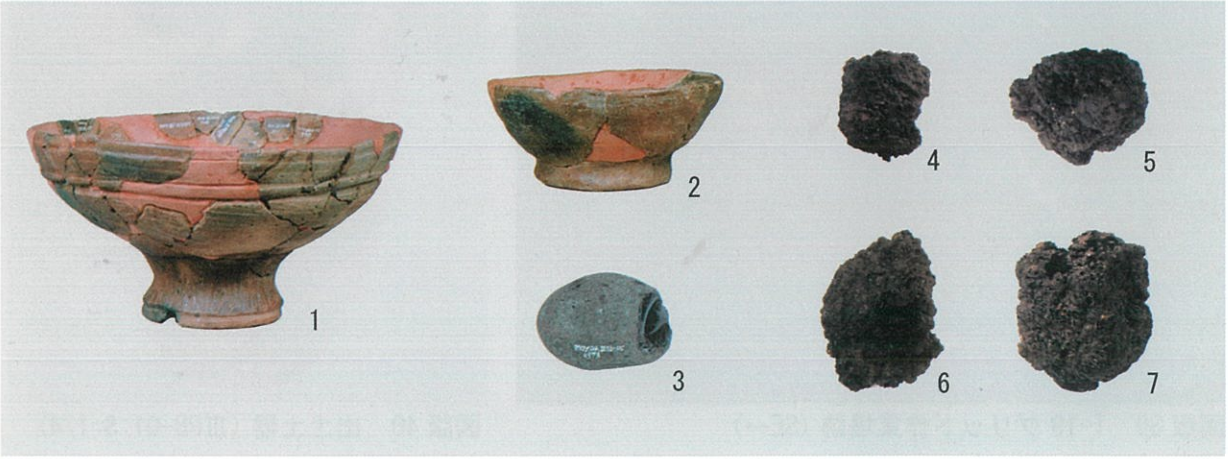
図版 32　銅鋺出土状態（NE→）

図版 33　鉄鏃出土状態（E→）

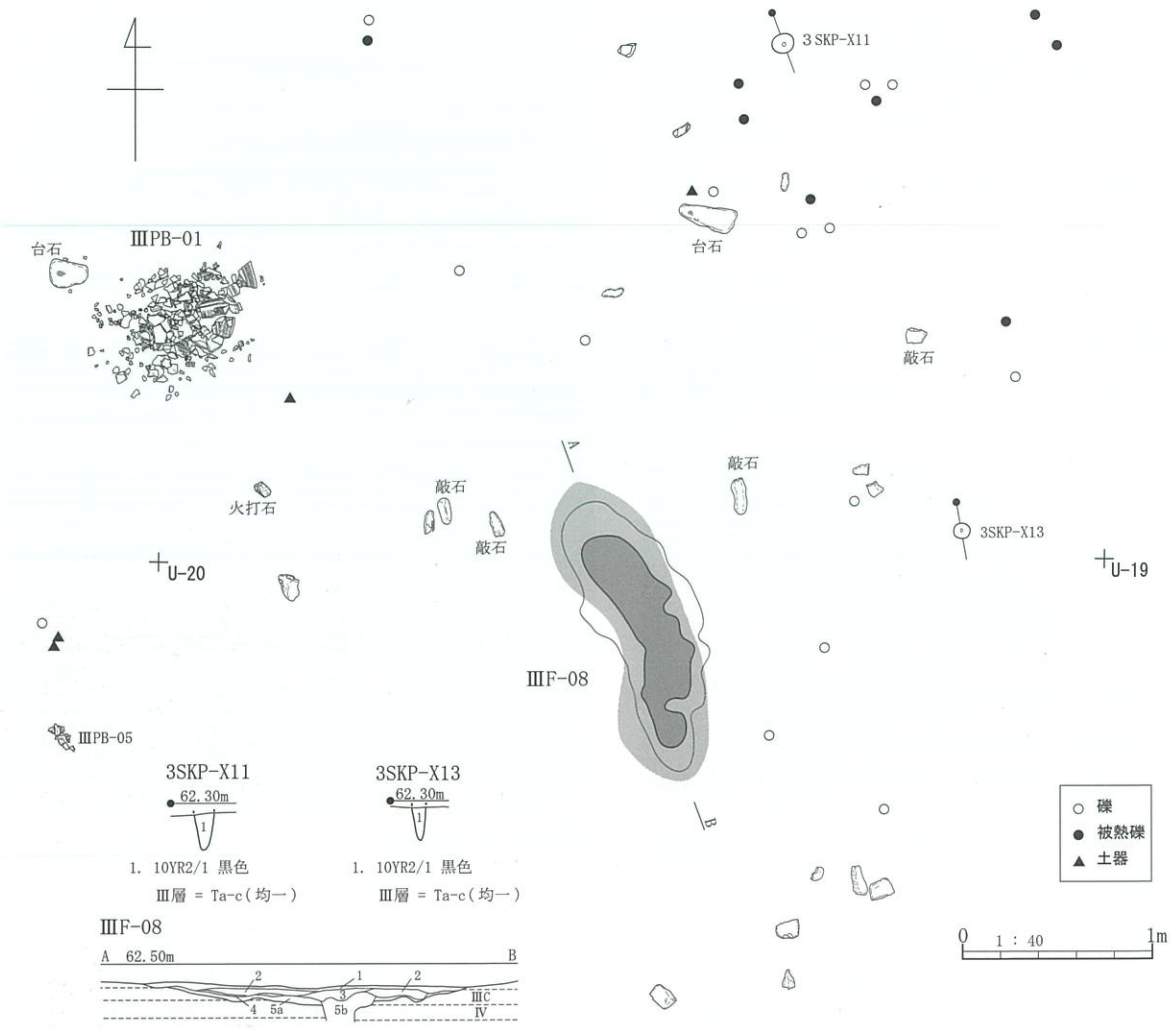
図版 34　ⅢF-14 焼土検出状態（S→）

図版 35　シカ中手・中足骨出土状態（S→）

図版 36　イナキビ塊（ⅢCB-53）出土状態（SW→）



図版 37　遺物集中区 2 出土遺物（1, 2:S=1/4, 3:S=1/2, 4 ～ 7: イナキビ塊 S=1/1）



1. 7.5YR2/3 極暗褐色 焼土とⅢb層を斑状に同量含む
焼骨小片多く含む 炭化物微量に含む
2. 7.5YR5/8 明褐色 被熱したⅢb1～Ⅲc 上部に焼骨片微量に含む しまりあり
3. 7.5YR4/3 褐色 被熱したⅢb1～Ⅲc 焼骨片少量含む 根による落ち込み
4. 7.5YR3/2 黒褐色 弱く被熱したⅢc 斑状に2層を含む
5a. 10YR2/1 黒色 焼土縁辺の黒色化したⅢc
5b. 10YR2/1 黒色 Ⅳ層への黒色土の落ち込み
ⅢF-08よりも古い時期の根穴？

図版38 T-19グリッド周辺作業場跡平面図

図版39 T-19グリッド作業場跡（SE→）

図版40 出土土器（ⅢPB-01:S=1/4）

る。またそれぞれに平坦な面が 1～2 面程観察できることから、皿状のものの上に乗せられていたのかもしれない。

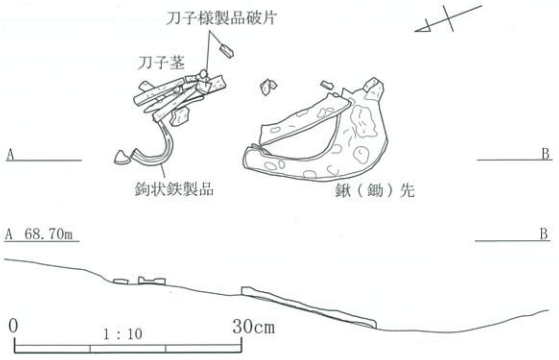
骨片を多く伴う焼土の内、ⅢF-08 周辺では擦文土器甕(ⅢPB-01:図版 40)と坏(ⅢPB-05)や、礫石器及び礫が散在した状態で多数出土している。礫石器は台石、敲石の他、周囲に剥離が施され縁辺が磨滅し潰れたチャート製の石器(図版 5-2,3)が出土している。この石器は石材や磨滅の状態から考えて火打石として使用された可能性が考えられる。

上記遺構・遺物は一部の焼土を除き、いずれも B-Tm より新しい時期の資料である。その他擦文期の遺物としては図版 48 の鉄斧が出土している。柄が袋状のソケットに収まるタイプで、袋部が開いた形をしている。

4．丘陵部の遺物(擦文～アイヌ文化期)

丘陵部は当初チャシの可能性が想定されていたが、調査の結果、溝跡等の遺構や造成の痕跡は認識できなかった。ただし丘陵先端の平坦部で鉄器が集中して出土した(図版 41～43)。

鉄器集中では、U 字形の鍬(鋤)先 1 点、刀子茎部分 4 点、鉤状鉄製品 1 点、用途不明の刀子様鉄製品 1 点がいずれも折れた状態でまとまって出土した。U 字形鍬(鋤)先は長さ 20 ㎝、幅 15 ㎝で、基部側端部が内側に張り出した形をしている。鉤状鉄製品は残存部分のみでの長さが 7 ㎝あり、厚幌 1 遺跡出土例と同様、2 側面に溝が入っている。刀子茎はいずれも目釘穴が無く 4 点が方向を揃えて束ねたような状態で出土している。無作為に遺棄されたというよりはこ



図版 41　鉄器集中（ⅢIPB-01）平面図

図版 42　鉄器集中検出状態（SE→）

図版 43　鍬先出土状態（SW→）

の場所に安置されたものと考えられる。調査時に認識することはできなかったが、浅い窪地内で出土したため、浅い土坑の中に置かれていた可能性もある。時期はB-Tm降下後の擦文後半期～アイヌ文化期に属するものと考えられる。

出土した場所が、前述の建物跡等が形成された日常的な場とは異なる丘陵部であることや、鉄器の出土状態を考慮すると、「モノ送り」的な行為を行った跡かもしれない。

図版44　鍔出土状態（N→）

図版45　刀子出土状態（SW→）

図版46　礫集中（ⅢSB-04:N→）

図版47　土器集中（ⅢPB-06）及びガラス玉出土位置（箸の所）（S→）

図版48　R-18グリッド鉄斧出土状態（E→）

図版49　ⅢPB-03取上状況（SE→）

Ⅲ　Ⅴ層の調査

1. 概　要

Ⅴ層の遺構は、竪穴住居跡４軒、土坑８基、Ｔピット21基、焼土４基を検出した。遺物は、土器片4,710点、剥片石器365点、礫石器455点、土製品１点、石製品７点、剥片類3,170点、礫4,200点の計12,908点が出土した。遺構の多くや土器片の約65%は高位段丘面ならびにその斜面からの出土で、縄文時代の日常利用空間の主体がこの範囲にあったことが伺える。主体時期は、縄文時代早期後葉の中茶路式期、中期中葉のサイベ沢Ⅵ・Ⅶ式期、中期末葉から後期初頭の余市式期である。

2. 住居跡

住居跡は高位段丘面のほぼ中央部に２軒（円筒上層式期）、丘陵先端部の狭小なテラス状の段丘面に１軒（余市式期）、中位段丘面に１軒（中茶路式期）を検出した。このうち、余市式期のＶH-02としたもの（図版51）は、緩斜面を切るかたちの楕円形プランで、４本の主柱穴を台形状に配置し、ほぼ中央に石組炉を設けるものであった。炉は、根穴の貫入により板状の炉石が床面ごと押し込まれている状態であった。床面直上より古手の余市式土器が出土している。ＶH-01はＶH-03と切り合いをもち、北西壁際の床面よりサイベ沢Ⅶ式（図版53）が出土していることから縄文時代中期中葉の所産と思われる。ＶH-04は中位段丘面で検出した唯一の住居跡で、構築層位がⅥ層で、縄文時代早期の所産と思われ、溝状のＴピットに（TP-18）切られていた。ほぼ中央部に地床炉を確認したが、柱穴は確認できなかった（図版54,55）。

3. Tピット

Ｔピットは、計21基検出した。溝状タイプ（図版54）が10基と楕円形タイプ（図版55）が11基あり、うち８基には逆茂木跡がある。明確な配列は確認できない。また、試掘調査において低位段丘面でも検出していることから、発掘区のほぼ全面に分布するものと思われる。

4. 土　坑

土坑は８基検出した。縄文時代中期以降のものと思われるものは、直径１ｍ前後の浅い円形プランのもので、２基検出している。いずれも伴出遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

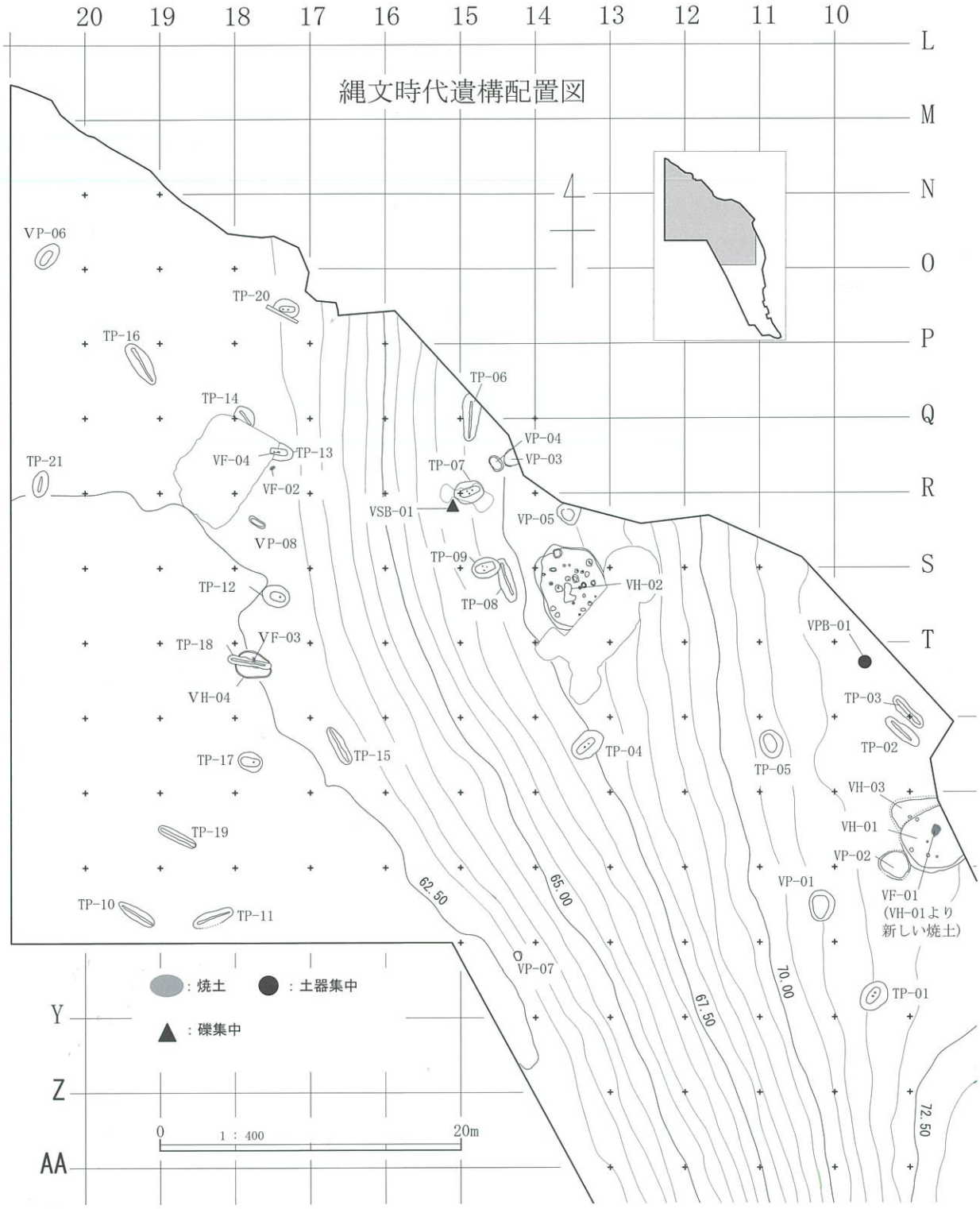
5. 焼　土

焼土は４基検出した。灰層や焼骨片を伴うものは無く、縄文時代後期初頭以前のものと思われる。

6. 出土遺物（図版58～60）

土器は縄文時代早期中茶路式や東釧路Ⅳ式が主にⅥ層より出土し、中期のサイベ沢Ⅵ～Ⅶ式、萩ヶ岡３・４式がＶｃ層、中期末葉から後期初頭の余市式がＶｃ～Ｖｂ層にかけて出土している。

図版58-１～５が中茶路式。２,３は同一個体片で、上半が微隆起線間に圧痕の浅い短縄文を施し、下半部は羽状構成の縄文が施されている。４は縦位の微隆起線文が施され、胎土には粒径１mm以上の石英結晶粒を多量に含んでいる。５は、波状の微隆起線文で構成され、上半には結節回転文が施されている。６は東釧路Ⅳ式。７は前期の縄文尖底土器群の破片資料で、器厚15mmと厚手で多量の繊維痕を残す。８～10はサイベ沢Ⅵ式で、貼付帯間に馬蹄形撚糸圧痕文や棒状工具による刺突列が施されている。11はサイベ沢Ⅶ式で口縁部に撚糸圧痕文を施す波状貼付文が施され、４ヶ所にボタン状貼付文が施されている。地文は第１種結束羽状縄文である。12は貼付帯上に絡条体圧痕文



図版50　縄文時代遺構配置図

を施す萩ヶ岡１式。13は萩ヶ岡３式で、半截竹管内面による２段の平行沈線文が施されている。14～19は萩ヶ岡４式では殆どが竹管や棒状工具による刺突文を施すもので、縄線文を特徴とするものは出土していない。地文は斜行縄文か第１種結束斜行縄文のみである。図版59-20は北筒式で数個体分が出土するのみである。21～32は余市式で、今回の調査で最も多く出土した。底部付近まで横環する貼付帯または地文羽状縄文(31,32)が多段に構成される古手のものと思われる。特徴的な文様要素として、円形刺突文(21～23)、口縁部無文帯(21,23,27)、重複縄文(24～26)、縄線文(29,30)が

ある。33～35は同時期のものと思われるもので、粒径1mm前後の石英結晶粒を多量に含む。これらの特徴から、本遺跡の主体的な時期は平成14･15年度調査した厚幌1遺跡とほぼ同時期のものと思われる。また、36,37は広口壷形土器と思われるもので、渦巻ないしはJ字状モチーフの浅い沈線文と圧痕の浅い充填縄文が施されている。38.39は、タプコプ式で、地文施文後に器表面のナデ調整を行い、口縁部内面には横走気味の縄文が施されている。38は縄線文を伴う縦位貼付文、39には縄線文が施されている。40は縄文晩期の浅鉢。Ⅲ層から38点、Ⅴ層から13点が出土している。41は続縄文期前葉の小型の深鉢で、胴部下半は縦走気味の斜行縄文、上半は条が横走する。

剥片石器は各種の器種が出土している。図版60-1～9は石鏃で、6～9が有茎のものである。10～13は石槍。14は石錐で先端部が著しく磨滅している。15～17はつまみ付きナイフ。 18～22)はナイフ・スクレイパー類で、19,21,22は刃部がやや内湾している。なお、石鏃については、図版68の3点はT－15･16区のⅥ層より出土した縁辺部を鋸歯状に加工した無茎石鏃である。出土層位、剥離技術より早期の所産と思われる。

礫石器についても各種の器種が出土している。図版60-23～25は石斧類、図版69は丸のみ形石斧で、片岩製。表面の刃部の抉り加工は浅く、調整は長軸に対して僅かに左傾する。26～28は敲石。29は北海道式石冠。30は擦石で、素材礫断面が三角形状。31は砥石で、素材礫断面が四角形状で、3面の使用面が認められる。他に掲載していないが台石・石皿類も多数出土している。

石製品は、図版72-1は勾玉状で、赤色塗彩されている。孔部分にも顔料が付着している。2は突起を有する垂飾で蛇紋岩製。中央上位の穿孔は紐擦れ跡が観察できる。3～5は飾玉の未成品と思われる。図版71は粘板岩製の短剣様石製品で、尖頭部が鋸歯状に加工され、把握部はやや厚みがある。

図版51　竪穴住居跡（VH-02）完掘（W→）〔ピンポールは主柱穴〕

図版 52　竪穴住居跡（VH-01）完掘（W→）

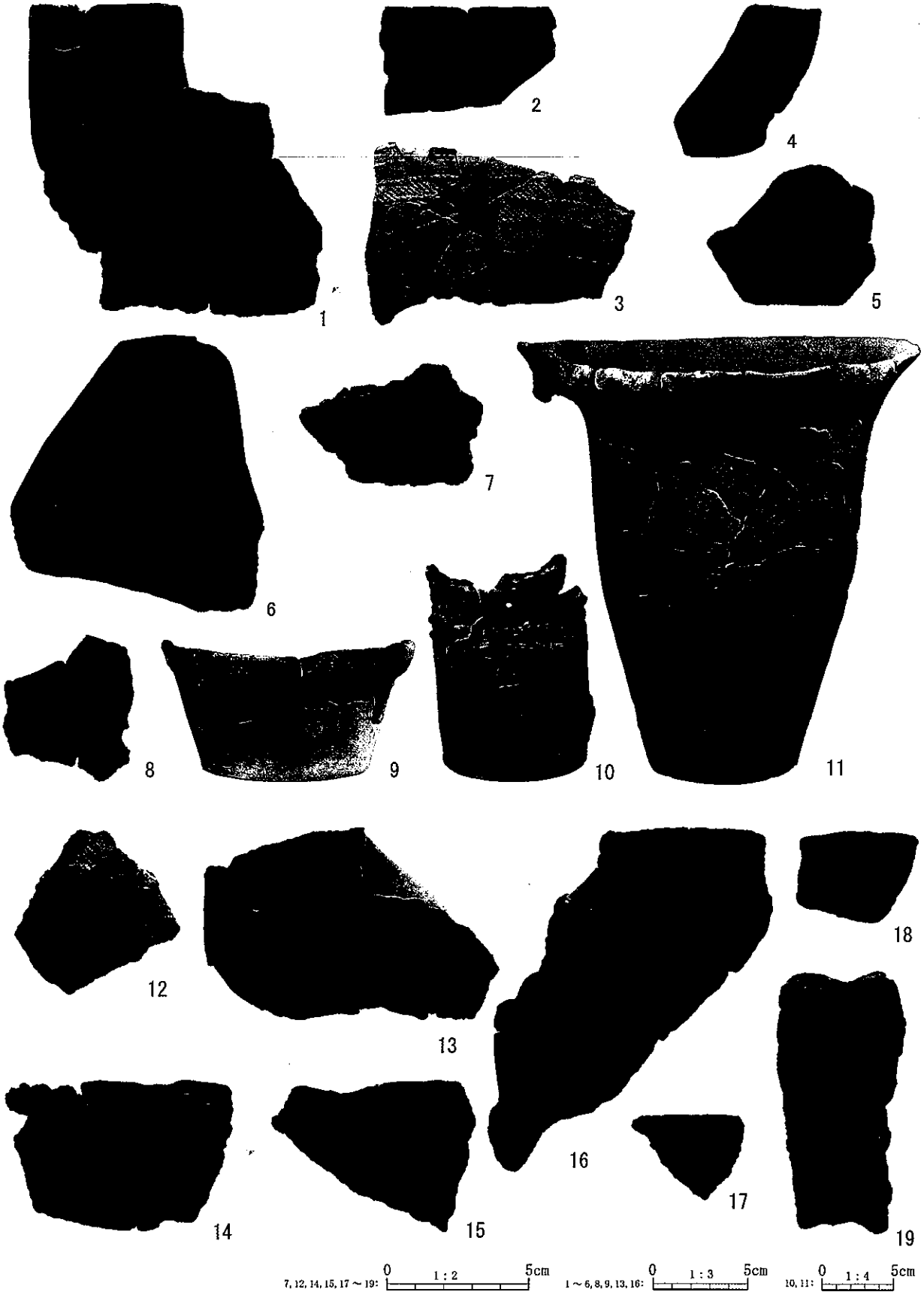
図版 53　VH-01 出土遺物（S=1/5）

図版 54　TP-18・VH-04 完掘（W→）

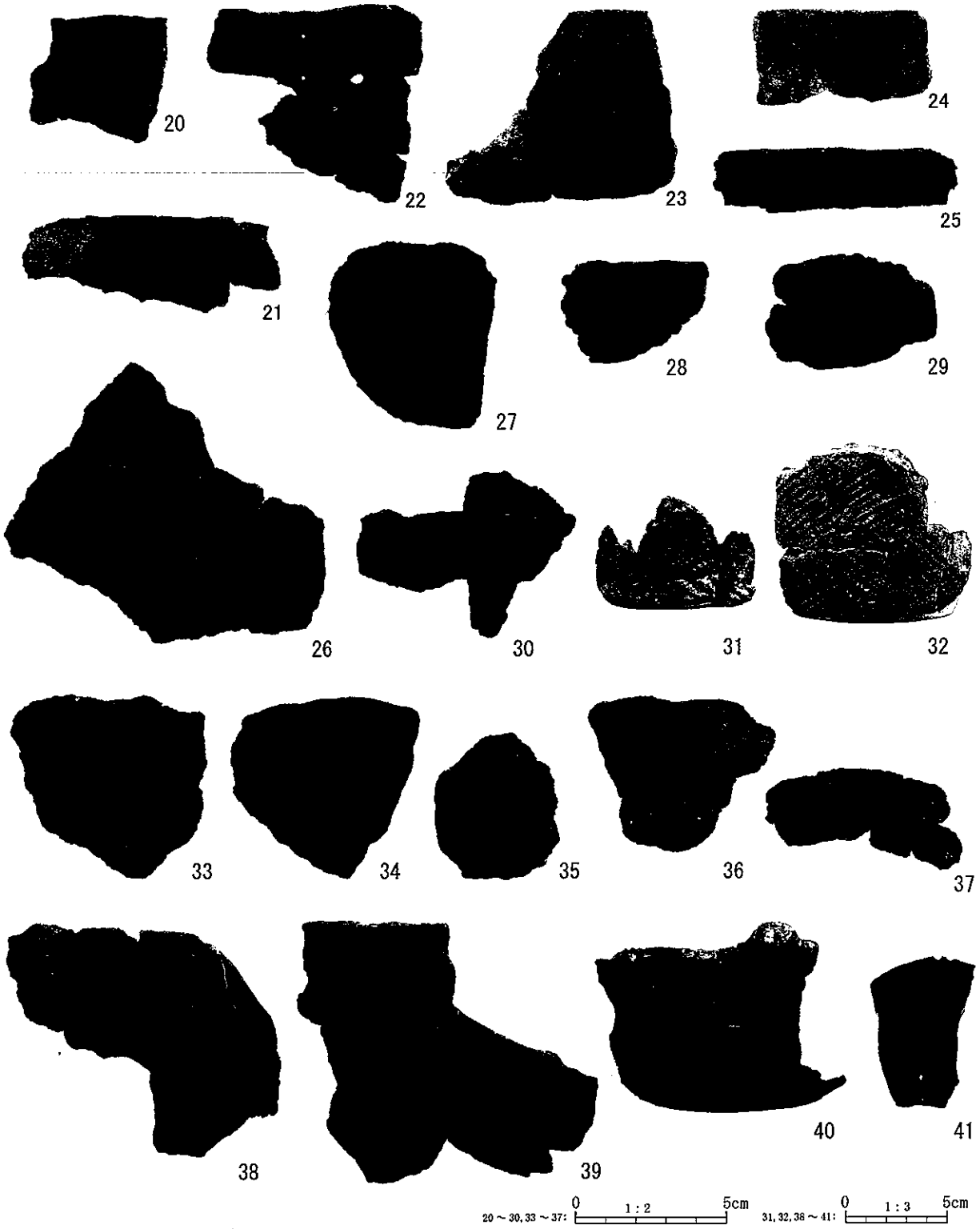
図版 55　TP-18・VH-04 断面（W→）

図版 56　TP-01 完掘（SW→）

図版 57　TP-01 断面（SW→）



図版 58　V 層出土の土器 (1)



図版 59　V 層出土の土器 (2)

この他、フレイク・チップ類が 3,170 点出土しているが 90%以上は黒曜石で、集中出土地点は検出していない。また、礫については、約 4,200 点が出土しており、95%以上は、泥岩・砂岩・礫岩の堆積岩である。

図版60　Ⅴ層出土の石器

Ⅳ　Ⅸ層の調査

1．経　緯

後期旧石器時代の遺物は高位段丘面先端付近の狭小なテラス面（丘陵部）に検出し、縄文時代のTピット（TP－7）調査中に発見された（図版50）。TP－7は楕円形を呈し坑底面に杭跡をもつタイプである。この杭跡の深さや傾きを確認するためにトレンチを設定し15cm程掘り下げたところ、断面確認調査中に杭跡の坑底付近から黒曜石製の剥片が1点出土した。更にこのトレンチ内を精査したところ同様の剥片が数点出土した。このことからTピットの坑底面全体を剥片が出土した土層まで掘り下げたところ70～80点程の剥片が発見された。これらの遺物出土状況によって縄文時代の包含層より下位に後期旧石器時代の遺物包含層が存在することが判明し、中位段丘面と丘陵部（TP－7の地点）の1箇所ずつトレンチによる旧石器確認調査を行なった。この結果、丘陵部のトレンチから遺物が出土した。発掘期間も終了間近であったためトレンチ内の堆積状況の実測と遺物の取り上げを行った。発掘調査終了後、丘陵部を中心に旧石器時代の範囲確認調査を行い、遺物包含層と思われるハードローム層の広がりを同一地形面の範囲に322㎡確認し、平成17年度に調査を行うこととなった。

2．層　位

層位はトレンチ調査の土層観察で大きくⅧ・Ⅸ・Ⅹ層に分層した。Ⅷ層はTa－dスコリアで土層に大きなうねりが見られる。層厚は約75cm。Ⅸ層はにぶい黄褐色ローム層で、しまり具合や礫の混入の違いによりa、b1～3、c1、c2に細分した。遺物は全てこの層から出土している。Ⅸc層は極めて締りの強いハードロームで、遺物の94%はこの層から出土しているため、インボリューション等の影響を殆んど受けていないと思われる。Ⅸ層の層厚は約35cmでⅨc層の層厚は平均で10cmである。Ⅹ層はシルト・砂・礫層が互層堆積を成している事から河岸段丘堆積層と考えられ、一連の堆積が少なくとも2ステージ繰り返されている。この層の中には粗粒砂層の上下にEn－aパミスが確認される。このことにより後期旧石器時代の遺物包含層はEn－aより上位、Ta－dより下位に広がっている事がわかる。また、中位段丘面からはⅨ層に対応する層は見つかっておらず、遺物も出土していない。

3．遺　物

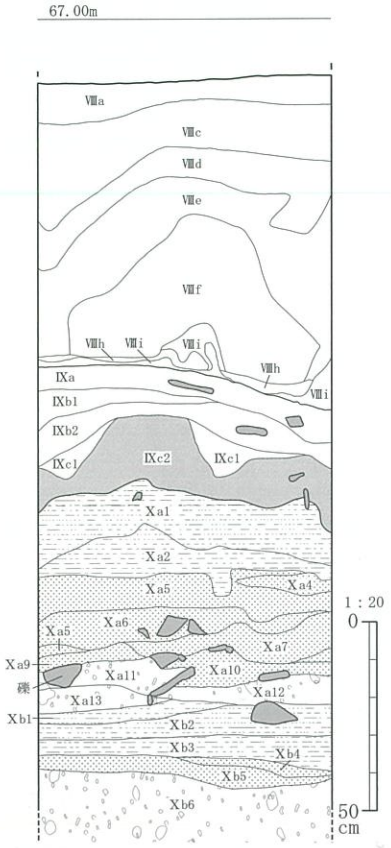
今回出土した遺物は2×3mのトレンチ内で総数385点である。内訳は細石刃核1点、細石刃48点、削器1点（3点接合）、彫器削片4点、剥片329点である。石材は黒曜石344点、頁岩41点と黒曜石が89%を占める。また黒曜石の産地については現在分析中であるが、肉眼観察によると赤斑で半透明のものが多い。以下に特徴のあるものを図示した。

細石刃核（図版65）

細石刃核でトレンチ内から1点出土した。Ⅸc層で検出され、両面調整され両側縁に作業面をもつ。打面は打面形成時の打点が遠く、打面再調整や白滝型のような擦痕調整は見られない。今回出土した細石刃とは接合関係にない。

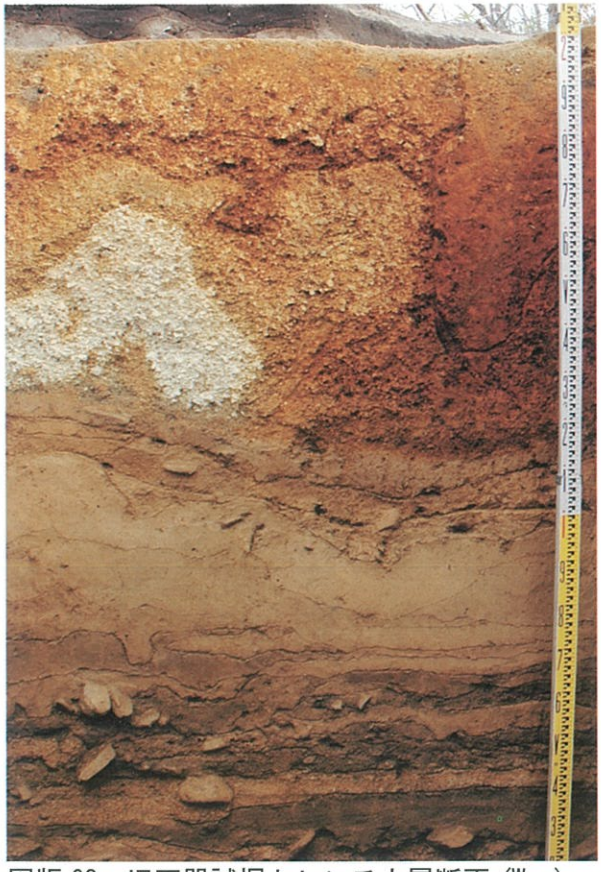
細石刃（図版66－1～7）

1は接合資料である。1～3は先端部が湾曲し、細石刃核作業面長軸長に近い段階のものと思われる。5、6は先端部を欠損している。石材は全て黒曜石であるが、1～6は赤斑に半透明で、7



Ⅷa.	7.5YR6/6	橙色	Ta-d 風化Ｌ － Ta-d1 スコリア（斑状）＝ Ta-d2 スコリア（φ5↓）
b.	5YR4/6	赤褐色	Ta-d2 スコリア（風化）－ Ta-d2 スコリア（φ10↓ 未風化）保水性有
c.	7.5YR5/6	明褐色	Ta-d2 スコリア（やや風化）
d.	7.5YR4/6	褐色	Ta-d2 スコリア（未風化）
e.	10YR5/4	にぶい黄褐色	Ta-d2 スコリア（やや風化） 保水性有
f.	10YR6/2	灰黄褐色	Ta-d2 スコリア（未風化） 硬質パミス 保水性無 乾燥により白色化著しい
g.	7.5YR4/6	褐色	Ta-d2 スコリア（やや風化） 保水性やや有
h.	2.5Y4/2	暗灰黄色	Ta-d1 スコリア － Ta-d2 スコリア（φ2↓）
i.	10YR5/6	黄褐色	Ta-d アッシュ風化ロームか？
Ⅸa.	10YR4/3	にぶい黄褐色	ローム ≡ 転礫（φ50↓）・炭化物（φ1↓）
b1.	7.5YR5/6	明褐色	ソフトローム ≡ シルト岩角礫（φ3↓）・転礫（φ30↓）
b2.	10YR5/4	にぶい黄褐色	ソフトローム － シルト岩角礫（φ3↓）・転礫（φ50↓） しまり弱 粘性強
b3.	10YR6/4	にぶい黄橙色	ソフトローム － シルト岩角礫（φ30↓） しまり弱 粘性強 Ⅸc 層の窪みに溜まる
c1.	10YR7/3	にぶい黄橙色	ローム ＝ シルト岩角礫（φ10↓）・シルト岩片（φ2↓） しまりやや強 粘性強
c2.	10YR7/3	にぶい黄橙色	ハードローム ＝ シルト岩角礫（φ10↓）・シルト岩片（φ2↓）≡ 炭化物（φ2↓） しまり極強 粘性弱 風性堆積層か？ 旧石器包含層
Ⅹa1.	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土 ＝ 砂質ローム（斑状）≡ 炭化物（φ1↓）・シルト岩角礫（φ3↓） しまり強 粘性弱
a2.	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土 － 砂質ローム（斑状）≡ 角礫（φ3↓） しまり有 粘性弱
a3.	10YR7/3	にぶい黄橙色	粘土 ≡ 極細砂粒（均一） しまり強 粘性有
a4.	2.5Y6/4	にぶい黄色	シルト ＝ 極細砂粒（均一） しまり弱 粘性弱
a5.	2.5Y5/3	黄褐色	極細砂粒 ＝ シルト（均一） しまり無 粘性無
a6.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト － 極細砂粒（均一） しまり無 粘性弱
a7.	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト － 極細砂粒（斑状） しまり無 粘性弱
a8.	2.5Y4/2	暗灰黄色	粗砂粒 ＝ シルト岩角礫（φ5↓）≡ ローム（斑状）・シルト岩角礫（φ30↓） しまり無 粘性無
a9.	2.5Y4/2	黄灰色	極細砂粒 ≡ ローム（均一） しまり無 粘性無
a10.	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト － 粗砂粒（均一）＝ En-aP?（φ3↓ 風化強）上位に主体的に入る
a11.	2.5Y7/4	浅黄色	En-aP? 風化ローム ＝ 転礫（φ20↓） しまり無 粘性強 保水性強
a12.	2.5Y5/1	黄灰色	粗砂粒 ＝ シルト岩角礫（φ20↓）≡ ローム（均一） しまり無 粘性無
a13.	5Y6/2	灰オリーブ色	粗砂粒 － シルト岩角礫（φ20↓）≡ ローム（均一） しまり無 粘性無
Ⅹb1.	2.5Y6/4	にぶい黄色	En-aP? 風化ローム － 粗砂粒（均一） しまり無 粘性弱
b2.	2.5Y6/6	明黄褐色	En-aP? 風化ローム ＝ 細～粗砂粒（層状）≡ 転礫（φ30↓） しまり弱 粘性強 保水性有
b3.	2.5Y4/1	黄灰色	極細砂粒 クロスラミナ発達している
b4.	10YR6/6	明黄褐色	En-aP? 風化ローム パミス形状無
b5.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト － 極細砂粒（均一） しまり無 粘性弱
b6.	2.5GY5/1	オリーブ灰色	扁平角～円礫（長軸 50↓）主体 基質粗砂粒

図版 61　旧石器試掘トレンチ土層堆積柱状図



図版 62　旧石器試掘トレンチ土層断面（W→）

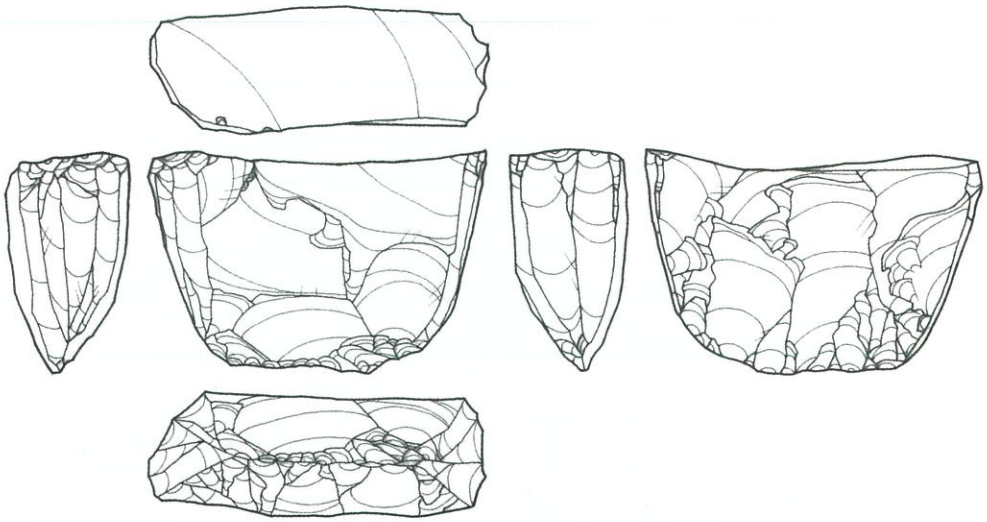
図版 63　旧石器遺物出土状態（W→）

図版 64　細石刃核出土状態（SE→）

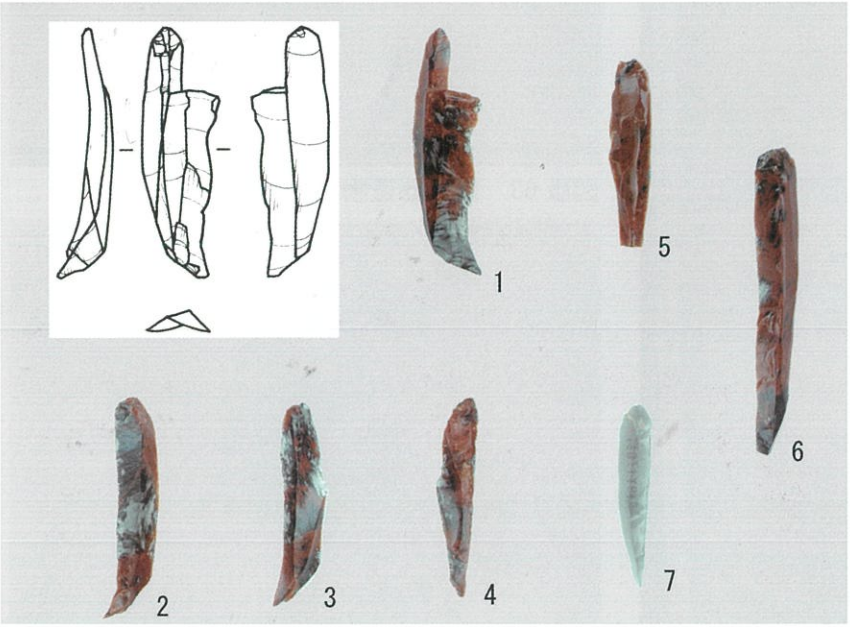
は半透明である。

削器（図版 67）

３点を接合した資料で、側縁を欠損している。両側縁とも剥離調整され、右側縁裏には微細剥離が施される。３点とも被熱している。



図版 65　細石刃核（S＝1/1）



図版 66　細石刃（S＝1/1）

図版 67　削器（S=1/1）

V 調査の成果概要

平成16年度の上幌内モイ遺跡の発掘調査は、半島状に張り出す高位段丘面から裾にかけての斜面の全域（丘陵部）とやや広域に形成される中位段丘面（平坦部）の北西側を行った。調査面積全体の約17.8%を調査したにとどまる。しかし、各時期において多くの成果があげられたことから若干のまとめを記す。

後期旧石器時代：厚真町内では初めての出土例となり、胆振・日高管内での調査例としては苫小牧市美沢１・３・10遺跡に次いで４例目となり、細石刃石器群の調査としては初例となる。

縄文時代：早期後葉から晩期中葉の各時期が確認された。遺構数はやや少ないものの、各時期をとおして利用されていたことがわかる。遺物について、縄文土器の胎土中に粒径１mm前後の石英結晶粒を多量に含むものが比較的多く出土した。時期的には中茶路式から見られる。この様な胎土は、「十勝溶結凝灰岩」に起因する石英結晶で、富良野盆地に広範囲に堆積している。土器の地文や文様要素も胆振東部のものと異なることから、これらの地域で製作された土器が運び込まれたものと思われる。丸のみ形石斧についても、富良野盆地には石狩川水系の空知川が流れており、何らかの地域的な関連性が指摘できよう。石器、石製品においても、鋸歯状石鏃や突起を有する飾玉、短剣様石製品は、道内においても初例もしくは殆ど類例の無いものである。

擦文文化期：遺物集中区とした２ヵ所については、遺物出土状態や遺物器種構成、個々の遺物が被熱していること、焼土に魚骨等の焼骨片が殆ど含まれないこと等から何らかの儀礼行為を行った領域と思われる。時期的には平取町カンカン２遺跡と同時期のものと思われ、10世紀後半から11世紀代の所産であろう。焼土＝火を伴う儀礼行為は現在に伝わるアイヌ文化にもある。遺物の特異的な廃棄に関しても“モノ送り”的な要素が伺われる。また、炭化イナキビ塊やクルミ核、被熱したシカの中手・中足骨などの種子や動物遺存体の集中についても、厚幌１遺跡のアズキやオオムギ・コナラ属を中心とした中世アイヌ期の炭化種子集中に地域的、時間的に継続、発展する関連性を示唆することも可能であろう。団子状のイナキビ塊についても、栽培植物の加工・調理を推察するうえでも貴重な資料といえる。これらの遺物集中区からは、須恵器や青銅鋺などの本州系遺物と黒曜石の道東系遺物が出土している。特に青銅鋺については、１遺跡から４個体以上出土した例としてはカンカン２遺跡についで２例目となる。流通ルートやその背景となった社会状況を考慮するうえでも貴重な資料といえる。この他、焼土に多量の焼骨片を含み周囲から、台石・敲石・火打ち石が出土した作業場跡と推定される領域を確認できたが、これまでの発掘報告例は殆ど無い。この時期の空間利用を推察するうえでも貴重なデータとなろう。今後は、これらの領域を形成した擦文人たちの、平地式住居跡も含めた居住領域の検出を課題としたい。

アイヌ文化期：チセ跡は、民俗例と一致する東西に長軸方向を有する平地式住居跡で、樽前ｂ火山灰降下以前のどの年代まで遡るかが、今後の課題となろう。

以上の点から、厚真川河口より29km遡る上流域において本州系遺物や富良野盆地系、道東系遺物の出土は、単に山間部の“行き止まり”ではなく、後期旧石器時代からの山越えの交易ルートの存在が浮かび上がる。また、擦文後期の儀礼に関しては、擦文文化の終末とアイヌ文化の成立についてや、交易・情報伝達ルートや広く東北北部から北海道島の当時の社会情勢を考えるうえでも、貴重な遺跡と言える。今後、上幌内モイ遺跡から新たな情報発信が期待されるともに、継続する発掘調査の責務を強く感じる。

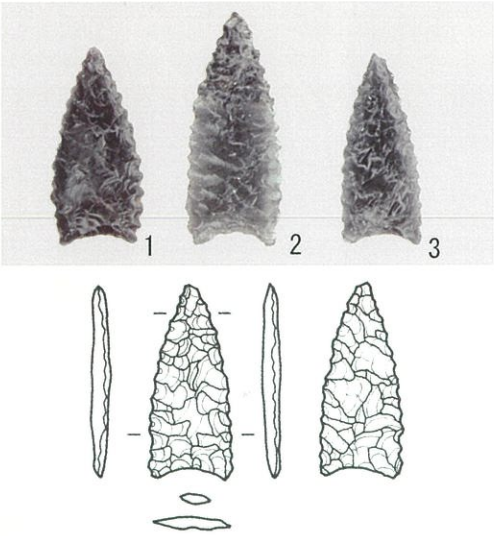
報 告 書 抄 録

ふりがな	あつまちょう かみほろないもいいせき
書　名	厚真町 上幌内モイ遺跡
副書名	厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査概要報告書
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	乾 哲也・小野 哲也・奈良 智法
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1 ㈹0145-27-2321
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″
かみほろないもいいせき 上幌内モイ遺跡	ほっかいどう ゆうふつぐん 北海道 勇払郡 あつまちょう あざ ほろない397の1 厚真町字幌内397-1	1581	79	42° 46′ 15″	141° 59′ 56″

調査期間	調査面積	調 査 原 因
20040511 ～ 20041031	3,942.37㎡	厚幌ダム建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上幌内モイ遺跡	集落跡 ・墳墓	後期旧石器時代 縄文時代 早・中・後期 擦文時代後期 中近世アイヌ期	後期旧石器 ブロック 1 縄文期:住居跡4 Tピット21、土坑8 焼土4 擦文期:焼土14 遺物集中区2 アイヌ期: 平地式住居跡1 建物跡2、焼土3	総数:17,972点 細石刃核・細石刃 縄文土器 続縄文土器 擦文土器・石器 土製品・石製品 鉄製品・青銅鋺 ガラス玉・骨角器 剥片類・礫 炭化イナキビ塊	擦文期の遺物集中区は儀礼場跡と思われる。 平成17年度以降も継続調査。



図版 68　鋸歯状石鏃

図版 69　丸のみ形石斧

図版 70　町民体験発掘（2004, 9, 11）

厚真町　上幌内モイ遺跡

－厚幌ダム建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査概要報告書－

発　行　日　　平成 17 年 3 月 18 日
編集・発行　　厚真町教育委員会
〒059-1601　北海道勇払郡厚真町京町 165 番地 1
電　話　（0145）－27－2321(代)
印　刷　　清文堂印刷㈱厚真支店
勇払郡厚真町本町 77－18

図版 71　短剣様石製品 (S=1/1)

図版 72　Ⅴ層出土の飾玉 (S=1/1)